2022年9月18日（日）主日朝礼拝説教

『主に望みをおく人』　井上隆晶牧師
詩編130篇1～8節、マタイ福音書18章1～5節

❶【深い淵の底から祈る】

詩編は昔の人たちのお祈りであり、預言の言葉も含んでいます。旧約時代では竪琴を弾きながらこの詩編を歌いました。修道院で用いられる祈祷書は、たくさんの詩編で構成されています。先ほど詩編130篇を朗読しましたが、ルターはこの詩編を最上の詩編の中の一つにあげていますし、ジョン・ウエスリはこの詩編によって回心に導かれたとも言われています。この詩編は古代教会から、七つの悔い改めの詩編の一つに数えられてきました。今日はこの詩編から「希望を持つ」とはどういうことかについてお話ししたいと思います。

1～2節で詩人は「**深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けて下さい。**」と叫びます。「深い淵の底」と訳されている言葉は原語では「深い所」で、底なしの淵という意味があります。ユダヤ人は水を恐がりました。ノアの時に世界を滅ぼしたのも、紅海でエジプト軍を滅ぼしたのもすべて水でした。深い淵はすべての者を飲み込む死を象徴していました。彼は今、そんな絶望的な状況にいます。上に這い上がることもできません。それが具体的に何なのかはわかりません。

3節を見ると「**主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰が耐え得ましょう。赦しはあなたのもとにあり、人はあなたを畏れ敬うのです。**」と祈ります。有名な祈りです。司式補佐の開会の祈りもここから取られました。詩人は深い淵の底で自分の罪を思い出し、見せつけられ、罪の赦しを祈っています。しかし罪を繰り返し犯す、罪をやめられない、これが私たち人間です。神がもし、正しさを求めるなら誰も救われません。そこで詩編の著者は気づきます。「**赦しはあなたのもとにあります！**」ここで〝**あなたのもと**〟と言っています。私たちのもと（側）にはないということです。私たちの立派さや正しさ、熱心さや清さでは赦されないということです。罪の赦しはすべては神にかかっているのです。救いとは一方的に神のもの、上からのものです。そこでこの詩人は、神の口から「赦す」という言葉が出るのを見張りが朝を待ち望むように、今か今かと待ち望んでいるというのです。**回心とは、このように神に心と希望を向けることであり、私たちに向けることではないことが分かります。**

イエス様は一人の子供を呼び寄せ、真ん中に立たせて言われました。「**はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。**」（マタイ　18：3）少し軌道修正せよと言うのではありません。古い心を捨てて、新しい心を入れろというのです。それが入れ替えるということです。つまり、自分というものに一切頼らない心です。子供のすごさは親を絶対的に信

頼し、頼り切って生きているということです。そのようにキリストを慕い、キリストを追いかけ、キリストがいなかったら死んでしまうくらいに思う心になることが、心を入れ替えることなのです。

❷【主に望みをおく】

5節を見ましょう。「**わたしは主に望みをおき、わたしの魂は望みをおき、御言葉を待ち望みます。わたしの魂は主を待ち望みます。**」とあります。ここから7節まで「望み」という言葉が5回出てきますし、「待つ」という言葉が4回でてきます。この世の人たちが希望を持つ持ち方と、キリスト教徒が希望を持つ持ち方は違います。この世の人はこの世に希望を持ちます。この世の人、立派な指導者に希望をおきます。そしてこの世の景気が良く、気候が温暖で、病気もなく、戦争がなければ希望があるといいます。この世の状況を見て、希望がある、または絶望だといいます。しかしキリスト教徒は違います。私たちは「**主に望みをおき**」ます。聖書がはっきりと伝えているのは主に望みをおけということです。有名なみ言葉ですと「**主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。**」（イザヤ40：31）というのがあります。主に望みをおく人は力を得ますが、この世に望みをおく人は力を得ません。なぜならこの世は絶えず変化するからです。昨日まで確かだと思っていたことが明日は、不確かになります。助けてくれる人はやがて死んでいなくなります。すべては過ぎ去ります。この世の希望は必ず崩れます。しかしキリストに希望を置く人は元気になれます。

●この間、キリスト教連合会の総会で、結婚式の引き出物の残りのタオルを貰いました。せっかくなので使っていますが、そこに「**信仰と希望と愛、この三つはいつまでも残る**」（Ⅰコリント 13：13）と印刷されていました。いい言葉だなあと思うかもしれませんが、この信仰、希望、愛とは人間のものではありません。これはキリストから出た信仰、キリストに対する希望、キリストの愛は永遠に残ると言っているのです。**別な言い方をしたら、キリストをいつも信じて大丈夫、キリストにいつも希望をおいて大丈夫、キリストの愛をいつも信じても大丈夫、ということなのです。**先日、ある人に傷つけられた、その人に気が付いてほしいという人の相談を受けました。私はその人にいいました。「人に期待しても無駄だと思いますよ。その人から謝罪されても、あなたは恨みが残るでしょう。そんなことに命の時間とエネルギーを使うのではなく、神に心を向けて下さい。神はあなたを癒し、成長させて下さいます。」あまりにもこの世と人に期待する人が多いのです。私にはそれが残念でなりません。

❸【信仰とは待つこと】

最後に「待つ」ことを話しましょう。皆さんが深い穴の中に落ちたと思って下さい。自分の力ではとうてい上に這い上がることはできません。あなたの力は尽きました。何をやってもあなたは変われません。しかしキリストが必ず私たちを救

いに来てくれることを信じ、キリストに希望を持ち、深い穴の底で待つのです。しかし、ただ何もしないで待つのではありません。深い穴の中で諦めてしまってはなりません。諦める人は、もう自分は上に上らなくてもいいや、この暗いじめじめした穴の中で一生を生きよう、自分はもう変われないやと思う人です。そのような人はキリストの名を呼びません。私たちは上昇することを願わなくてはいけません。自分は変わろうと思わなくてはいけません。

●飯能の山キリスト教会の牧師をしている中村穣（じょう）という人が、冊子の中にこんなことを書いています。「私たちは〝ありのまま〟の意味を少し、違ってとらえているような気がします。…神様が、〝ありのまま〟でいいよと仰っていることを隠れ蓑にして、私たちは混とんとした、〝そのまま〟の状態でいいよ、と思ってしまうことがあります。」

ディズニー映画の「アナと雪の女王」でエルサが「ありのままの～」と歌った曲が大ヒットしました。それだけこの社会が、ありのままの自分が愛されることを求めているということでしょう。でもこの「ありのまま」という言葉が曲者（Quilter）なのです。神様が造られた本当の私は、今の私の姿でしょうか？違うと思いませんか。神様が造られたありのままの私は美しく、すばらしく輝いています。しかし罪と死がありのままの私を覆い、私を曇らせ、輝きを失わせ、ありのままの私を開花できなくしているのです。私たちは他の誰かになる必要はありません。わたし自身になれば良いのです。しかし自分を開花させるためには罪を取り除かなければなりません。その為にはキリストと共にいなければなりません。キリストがあなたの罪を取り除き、あなたを開花させ、もっとすばらしいあなたに変容させてくださるでしょう。「**わたしの天の父がお植えにならなかった木は、すべて抜き取られてしまう。**」（マタイ 15：13）という言葉を聞いたことがありませんか？神が植えたものは残りますが、神が植えなかったもの（罪、死）は必ず抜かれるのです。

●４世紀のアウグスティヌスはこういいました。「不完全であっても怖れる必要はない。ひたすら自らを前進させよ。私は不完全であることを怖れる必要はないと言っているのであって、不完全さを愛せよと言っているのではない。あるがままにあれ。不完全さが中にある限り、前進せよ。日毎に加え、日毎に近づき、なお主の身体から離れるな。」

不完全さを愛してはいけません。罪を愛してもいけません。それは憎まなければいけません。そして戦うのです。走り続け、少しでも成長することです。ゆっくりでもいいのです。倒れながらでもいいのです。走っている者が賞を受けるのであって、走らない者には賞は与えられないのです。それが待ち望む姿勢です。キリストはゴールで待っていてくださるだけでなく、私と共に走って下さるお方です。あなたは独りぼっちではないのです。主イエスと共にこれからも歩んでいきましょう。